

【目的】家庭における調理担当者の調理行動や食事状況にも様々な問題が提起されているが、これらいくつかの要因についての動向を探るため、5年間の変化について検討した。

【方法】1992年と1997年に本学食物栄養科在学生及び近隣の一般家庭を対象に家庭における食生活・調理の状況についてアンケート調査を行った。尚、有効回収数は1992年調査は160世帯、1997年調査は168世帯である。

【結果】5年間の経時変化として明確な差は少なかったが次のような傾向がみられた。

①調理時間をみると1日60分未満の世帯が92年6.9%から97年16.9%に増加したのに対し、2時間以上の世帯は減少しており、特に有職主婦にその傾向が顕著にみられた。夕食のみの調理時間でも30分未満の世帯が大幅に増加していた。②台所形式ではK式が減少したのに対し、LDK式が9.4%から18.2%に増加していた。③調理担当者の意識として食・健康に関心があるというものが減少する反面、献立をたてる時には栄養を重視するというものが若干増えていた。また、盛りつけ方法として大皿盛りが多いという世帯の増加傾向がみられた。④食事状況をみると、食事時間が規則的であるかについては92年と97年で殆ど変化はなかったが、家族が揃って食事をするかでは毎日揃う世帯が朝食では26.2%から17.9%に、夕食では43.8%から36.8%に減少したのに対し、殆ど揃わない世帯が朝食で37.3%から45.2%に、夕食では7.5%から10.1%に増加し、近年問題となっている『個食』化傾向が進んでいることが伺えたが、家族揃っての外食は若干増える傾向がみられた。一方、食事中に会話の多い世帯が減少する反面、常にテレビをつけている世帯が増えていた。